

UDLM

12

vol.340

December 31st

2023

年の瀬と市

2023 年も過ぎ去ろうとする時候、「師走」の名が示す通り、都市デザイン研究室のメンバーも慌ただしく毎日を過ごしています。
そんな目まぐるしい年の瀬の様相の移り変わりについて、「市」の観点から改めて振り返りました。

- p.2 年の瀬と「市」の場
- p.3-5 時代による年の瀬の「市」
- p.6 都市の瀬の「市」出現タイムライン
- p.7 デザ研メンバーの年越し

△浅草寺と参拝客。休日やシーズンでは寒空の下でも参拝の列が途切れることなく、その喧騒は年末の訪れを予感させる。

年末の「市」とその起源

年末、特に大晦日直前は、門松やしめ飾りといった「縁起物」とされる装飾物やおせち・雑煮などの食料のほか、日用品の買いだめなど多くの購買が生じる。こうした潮流は近年ではネットショッピングでも見られ、現実の都市空間でもネット上でも「年末商戦」が激化するようになって久しい。

さて、こうした年の瀬の時期に現れ出る特有の「市」は何を源流としているのだろうか。また、時代の変遷を経て現代ではこうした「市」はどのような形で現れているのだろうか。本号ではこうした年の瀬に表出する市に着目し、空間的・時間的に概観することを狙いとする。

なぜ年末に買い物を？ - 正月事始め -

そもそも何故正月に備えて年末に買い物をする習慣がついたのか。それには「正月事始め」という習慣が関わっている。

日本の神道において、年の幸せや豊作をもたらす「歳神様」は新年に訪れるという信仰から、松迎えなどといった**正月に向けての「準備」を行う習慣があった**。また、元々正月三が日は家で新年の到来を祝う「年籠り」が一般的で、家から出ないこともそうした理由の一つとして挙げられる。

そこから江戸時代においては、江戸城での行事から「煤払い」を行う習慣が庶民に広まるほか、流通の発達に伴い**厄除けのための品々が市でも売られる**ようになり、正月事始めにおいて「大掃除」と「縁起物の買い物」の側面が色濃く継承されてきた。

こうした様々な慣習や文化・信仰に加えマーケティング上の戦略も加わり混ざり合うことで、今日の年末での買い物文化が形成されてきたと考えられる。



大晦日に門松やしめ縄を売る様子



商家における煤払いの様子



現代の羽子板市の様子

- ・ 昔は「年末の買い物」はどこで行われていたのか？
- ・ 今は買い物の場はいつ、どこで発生しているのか？

年末の「市」の場の発生とその変遷をみる

年末に買い物をする習慣は江戸期から既にあり、年末にこうした「正月に向けた買い物ができる場」が市にできていく流れは当時既にあったと見せる。代表的なものとして、浅草寺で12月中旬に開催される「羽子板市」があり、他にも鷲神社での「酉の市」など、現代に継承されているものも少なくない。

そこで、まずは浅草寺を江戸期から継承されてきた「年の瀬ならではの市」について、**ミクロな場所でどのような形態で市が出現しているか**（露店が出るのか、既存店舗で売り物だけ変わるか）、またどのような物を取り扱っているのかについて調べてみる。

「浅草羽子板市」の成り立ち

毎月18日は観世音菩薩の縁日とされており、特に12月18日は「納めの観音」とも呼ばれる日である。

江戸時代、この日と前日の17日は「観音の縁日」に備えて、境内に露店が集まり、正月用品や縁起物を販売する「歳の市」が開催されていた。浅草寺の歳の市は江戸一の規模で、浅草橋から上野まで店が軒を連ね、賑わいを見せた。

特に江戸末期以降、羽子板が市の中心へとシフトした。これは羽子突きが羽根が病気を食べるトンボに似ていることから縁起物とされ、女子の誕生に羽子板が贈られる風習が広がったからである。ここから歳の市は「羽子板市」と呼ばれ、**現在は12月17日から19日までの3日間、境内に数十軒の羽子板店が賑わいを見せる**。

店主と客の交わる楽しいやりとりは見物客をも楽しませ、師走の浅草の風物詩となっている。



画像出典

六十余州名所図会 江戸 浅草市：国立国会図書館

<https://www.ndl.go.jp/landmarks/details/detail296.html>

歳の市 ポスター：浅草寺歳の市 公式 HP

<https://www.asakusa-toshinoichi.com/>

大晦日曙草紙（歌川広重 画）：江戸ガイド

https://edo-g.com/blog/2016/12/new_year_holiday_season.html/4

商家煤掃：東都歳事記

<http://kumi2.com/wakaomi/douage/touto.html>

江戸期～：浅草寺周辺および境内での「市」の出現

浅草寺における市は大きく2つに区分できる。1つは仲見世通りに常時立地する商店街の店舗群、もう1つは浅草寺境内に一時的に出現する露店群である。

また、境内においてもエリアによって明確に露店の特性が分けられる。先述した羽子板市の店舗は境内の五重塔周辺（青エリア）に分布し、販売物も羽子板を中心に凧や人形、書や絵などの縁起物とされる装飾物で占められる。

一方浅草神社前や西参道方面は飲食関係の露店が纏まって出店される。ここは比較的開けたオープンスペースであり、特に浅草神社前のスペースは今回の羽子板市に限らず、物産展などの催しにおいても露店が出され、非日常的な賑わいが現れるエリアである。

浅草寺境内



本堂東側のスペースは様々な企画が開催され、多くの露店が出店する。年の瀬ならではの雰囲気は比較的薄いのが、年末の賑わいに一役買っている。（写真は先月に開催された福島物産展の様子）



大学とのコラボ展のほか、キャラクター等を模した羽子板・人形も販売され、現代的な要素も見られる。江戸期においても人気の歌舞伎役者を描いた羽子板が売られたように、当時の世相を反映した側面も現代に継承されている。

宝蔵門前

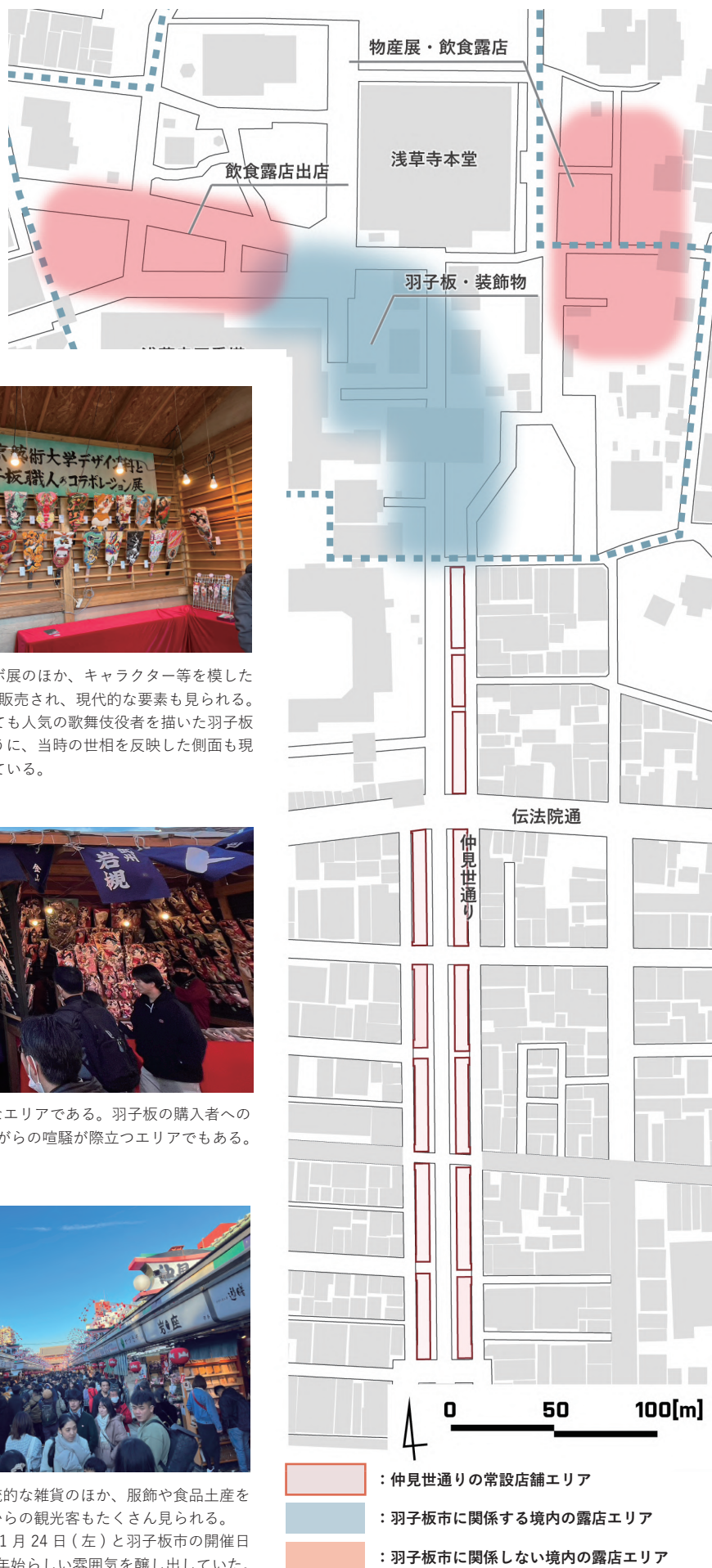


宝蔵門前は仲見世通りと直結していることから特に人の賑わいが顕著なエリアである。羽子板の購入者への「三本締め」や職人の威勢良いかけあいの声などが景気よく響き、昔ながらの喧騒が際立つエリアでもある。

仲見世通り



仲見世通りは東京を代表する門前町から形成された商店街であり、伝統的な雑貨のほか、服飾や食品土産をはじめ多種多様な店舗が所狭しと立ち並ぶ。有名観光地として、海外からの観光客もたくさん見られる。仲見世の市は常設であり、年の瀬のみに現れる市には含まれないが、11月24日（左）と羽子板市の開催日である12月17日（右）を比べると、既に店先に正月飾りが施され、年末年始らしい雰囲気を醸し出していた。



江戸期～：門前町や主要街道沿いでの「市」の出現

寺社での特別な催事の方で、江戸期における門前町から発展した商店街には「縁日」という慣習が継承されている。暦上での特定の日に訪れる参拝者向けに商売をしていたことから、現在も都内の一部商店街ではそうした縁日に路上に様々なものを売る露店が見れる。そうした商店街の一つ、巣鴨地蔵通り商店街においては「4」のつく日（毎月4日、14日、24日）

が縁日とされ、12月14日の縁日には服や食器など日用品、食料品、中には易など特徴的な露店も多く見られた。その中でもカレンダーや七味唐辛子、縁起物の装飾など年末年始を象徴する露店も数多く見られ、江戸期から継承されてきた「年の瀬の買い物の場」が現出していることが読み取れる。



デザ研メンバー「年末の買い物」から見る市の移り変わり

上記において、江戸期に形成された市における年の瀬の様相について追ってきた。しかし、「年末の買い物」についてデザ研の学生達にアンケートを取ったところ、寺社境内や商店街での買い物経験はほとんどなく、百貨店やデパート、スーパーが殆どであった。これは20年ほど前（2000年

代初頭）には既に年の瀬の「市」がスーパー・百貨店といった明治～戦後に形成された場でも表出、商店街に置き換わる形で定着したことを暗に示している。そこで、次は都内の百貨店における「年の瀬の市」表出の形態をみてみる。

幼少期に「年末の買い物」をした場所についてのアンケート結果

凡例

- 百貨店・デパート
- ショッピングセンター
- スーパー
- その他（ホームセンターや個人商店など）

海外

中国・上海市 スーパー・百貨店
韓国・ソウル市 百貨店（現在は衰退）
ポーランド 特になし（旅行のため）



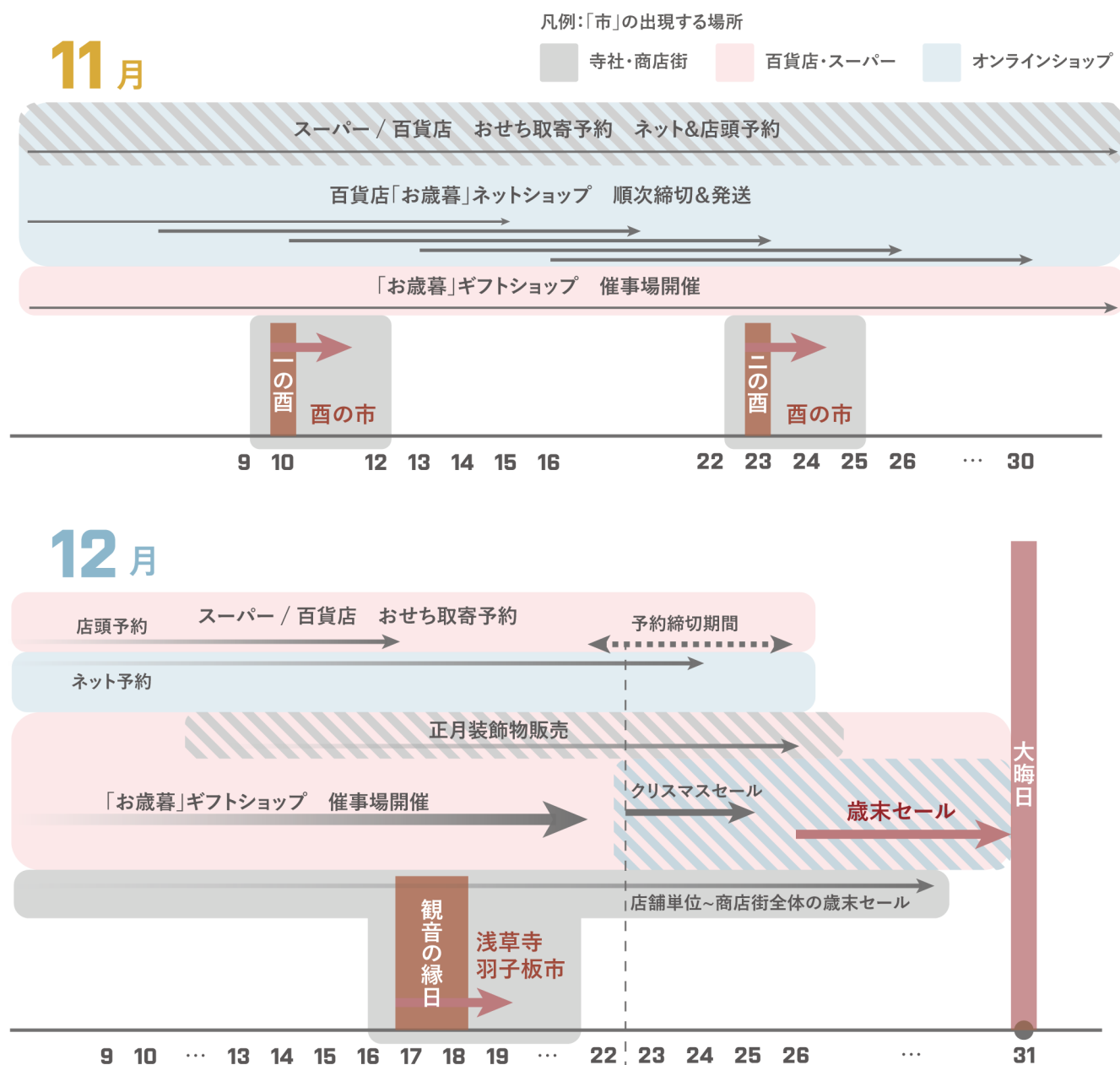
購入しているもの

- ・食料品：おせちや雑煮の材料、蕎麦や肉魚など大晦日や正月のための食料
- ・日用品：掃除用具や雑巾のほか、セールで安売りされる鞆など
- ・装飾品：鏡餅、門松、しめ飾りなどの縁起物

まとめ：年の瀬の「市」の出現タイムライン

年の瀬特有の性格を有する「市」の出現の形態は、時代の移り変わりに伴い種類を増やし、主な買い物の場がシフトしたり別の役割に形を変え継承されたりなどのプロセスを通じて多様化していったことがわかった。ここ

で、今日における年の瀬の市の出現について寺社・商店街・百貨店・スーパー・ネットショップを横断的かつフラットに概観し、年末の時間軸に沿ってダイアグラム形式にまとめた。



今まで挙げた年の瀬に表出する特有の「市」を時間軸に沿ってまとめたところ、以下のような特徴がみられる。

寺社や江戸期に形成された商店街

当時から暦上で特別な意味をもつ日に露店を設けて年末の買い物の場を形成しており、大晦日までの時間的な連続性から独立している。

近代以降発展したスーパーやデパート

お歳暮や歳末セールなど、大晦日を終点として継続的に「年の瀬の買い物の場」を展開している。

また、そうした店舗では戦後の時期を境にクリスマス文化が到来・浸透したことで、特に22日以降はそうした年の瀬の市におけるテーマが短期間で大きく入れ替わるようになっている。

ネットショッピング / ギフト

元々大晦日前の短い期間に集中していた買い物の場が1ヶ月以上の長期、かつ周期的に現れる事例もある。代わりに大晦日より早い時期に締め切られる傾向にある。



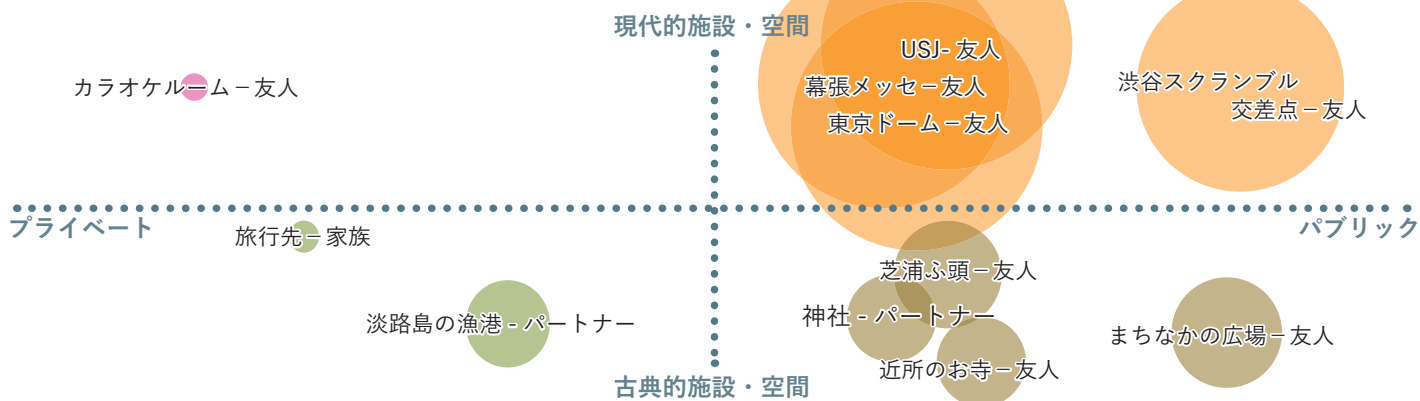
このように、現代ではこうした複数の時間スケールや空間領域を有する「年の瀬の市」が重層することで、全体で見ると「年末の買い物の場」が同時多発的にいくつも出ては消えるといった印象を与え、目まぐるしく変化する都市の様相を反映していると考えられる。

デザ研メンバーの年越し

1年の中で最後、そして1年の中で最初のイベントー年越し。『日をまたぐ』ことは毎日起こっているが、大晦日の夜ー年越しはやはり特別なものがある。年越しは家で家族と、というのが筆者の幼い頃の定番であったが、年を重ねるにつれて様々な場所で、様々な人と過ごすことが増えてきたように思う。

● 年越し場所のマトリクス ※円の大きさはその場所に集まる人数の多さのイメージを示す。

プライベートーパブリック、古典的施設・空間ー現代的施設・空間の二軸で年越し場所を整理した。



マトリクス右上のような数万人規模で人が集まる場所では、同伴者は数人の友人でも、現地では多くの人々と年越しを楽しんでいたことが窺える。マトリクス右下の神社やお寺にあるような、パブリックではあるものの小規模な

しかし、年越しという特別な時間を過ごす空間だからこそ、共通して見出される空間的な特徴があるのではないかと考えた。そこで、今回はデザ研メンバーの自宅以外での年越しの過ごし方（過ごした場所と同伴者）を調査し、その空間について筆者なりの考察を加えてみた。

場所では、人が集まる賑わいを享受しつつも同伴者との年越しを楽しむ様子が窺える。一方、マトリクス左上のカラオケルームのような、完全に自分たちだけの時間を楽しむ年越しも見られた。

● 空間構成の分析

調査により回答を得た場所の中から、マトリクス上で離れた位置にある、カラオケルーム・お寺（一例として筆者が訪れた寺院とした）・渋谷スクランブル交差点の3箇所を抽出し、その空間構成を分析してみた。



出典：ホットペッパーグルメ



出典：清荒神清澄寺 HP



出典：読売新聞オンライン

空間の性質や規模が大きく異なる3箇所であるが、幾つか共通点を見出すことができた。1つ目に、映像や音響で年越しを知らせるシンボルとなる装置があること。カラオケや渋谷ではモニターと音響で、お寺では本殿の鐘などがそれに当たる。2つ目に、その装置の前に人が滞留できる空間が広がっていること。この時、特に屋外では着座可能かどうかを問わず、他人との距

離もかなり近く、一般的に快適性の高い空間とは言えないが、多くの人が集まる。これらの共通点は、マトリクス上の全てに当てはまる訳ではないが、自宅以外の年越し場所の多くが備えている性質であるといえる。現在は年越しの場所として一般的ではない場所が、将来的に多くの人が年越しを過ごす場所になっているかも知れない。

COLUMN

POSTSCRIPT

今月は歳末や年越しをテーマに東京の商店街や百貨店を巡ったところ、変わりゆく年末の過ごし方の中にも案外昔から変わってなかったり継承されたりする慣習・文化が思いの外多いことに驚かされた。今年も都市デザイン研は「師走」らしく忙しい様相だったが、今昔をフラットに振り返り評価する視点を忘れずに持っていきたい。良いお年を！

12月号担当
M2 音山 尚大



WEB MAGAZINE

三角広場社会実験 開催！



上野プロジェクト

不忍通りブックイベント第2弾として、不忍通りの歩道の一画をお借りして社会実験を行いました。たった20m²ほどの小さな空間の設えを少しだけ工夫するだけで素敵な居場所に生まれ変わりました！（M1 元吉）

続きはコチラ >>>

<https://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>



デザ研大忘年会 開催！



都市デザイン研究室

鳳凰館本館にて5年ぶりとなる都市デザイン研究室大忘年会が開催されました！西村先生もご参加され、OB・OG交えた約60名が集まり、楽しいひとときを過ごしました。（M1 小林）

BOOK OF THE MONTH



実践
スポーツツーツリズム

日本スポーツツーツリズム
推進機構
学芸出版社
2022

市街地開催のマラソン大会によく出陣する身なので、都市観光の文脈からスポーツイベントについて書かれた本を読んだ。スポーツイベントはスポーツ振興以外にも、都市のイメージ向上や地域の連帯感醸成、インフラ整備等に寄与することが分かった。（M1 東条）